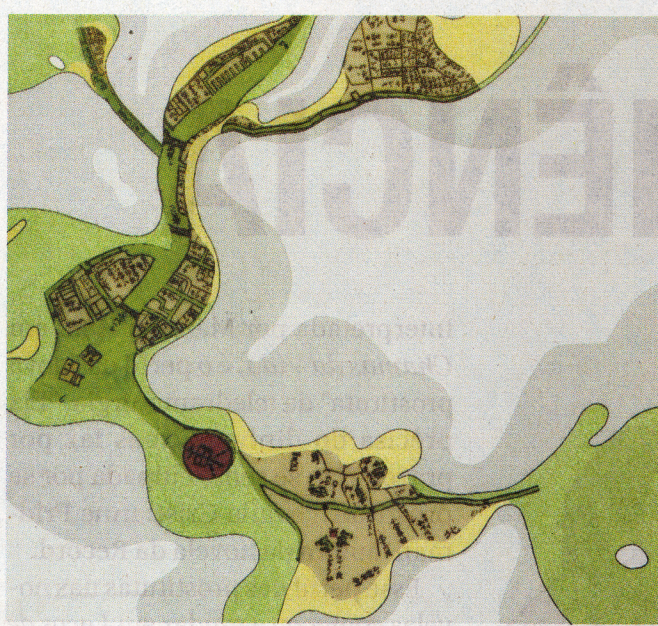
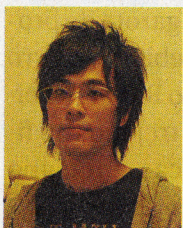


美術・ARTE

栽培の魔術師たち
『ブラジル × ヨコハマ 時の懸け橋』展かみにし
上西エリカ

《In (Verses) Ways》

ふくしまのふひろ
福嶋伸洋

限りない夢と不安とを抱き、かつてブラジルへと船出した幾多の人々を見送った横浜、そして、現在では首都圏でもっとも多くブラジル人が住む地域のひとつである横浜で、9月5日から26日まで、『ブラジル × ヨコハマ 時の懸け橋』と題された、この年にこのうえなくふさわしい展覧会が開かれている。

間部学、大竹富江といったすでに名声の定まった一世画家、また、金子太郎や大岩オスカルといった二世画家の作品が展示されている第一部「日系画家100年の歩み」では、彼らが、処女地に鋸を入れるようにカンヴァスに筆を突き立て、日本のものでもヨーロッパのものでもない絵画を築き上げていった痕跡をたどることができる。

第二部「日本・ブラジル現代アート交流」で取り上げられているのは、ブラジルを活動の場とする日本人アーティストと日本で活躍するブラジル人アーティストである。

建物に入った瞬間から、コーヒーの強いアロマで私たちを作品空間に巻き込む三梨伸の「ブラジリアン宮殿」は、コーヒーの粉を円錐状に固めたものが一室に整然と並び、その奥に同じくコーヒーで作られた立像が据えられた作品である。その奇妙なまでの静けさ、像の神々しさ、禍々しさのためか、円錐のひとつひとつは墓標のように見える。その全てが、私たちの日常を彩るコーヒーが、世界の数々の農園で生まれ、私たちのもとに届くまでの歴史のなかに、どれだけの暴力が、どれだけの死が潜んでいるのかを、そっと想起させるようである。

日本に留学中の日系三世の若手アーティスト、上西エリカは、ポルトガル語圏でもっとも重要な二人の詩人、ブラジルのカルロス・ドウルモン・ヂ・アンドラーヂと、ポルトガル

のフェルナンド・ペソーアの詩を作品のなかに細密に描き込み、文字を言葉としてではなく、グラフィックとして提示している。

「無定形言葉の培養」と題されたシリーズには、遺伝情報のように詩の言葉が縫い込まれた、染色体の形をした物体の作品があり、また、おそらくきわめて難しい実験を経た結果なのだろう、言葉たちがシャーレのなかで生命を宿されている作品がある。

サンパウロの今年のカーニバルで日本人移民100周年へのオマージュを捧げたサンバチーム、ヴィラ・マリアの山車のひとつには「栽培の魔術師たち(Mágicos da Agricultura)」という名前が付けられていた。私たちにとって限りない名誉であるこの褒め言葉は、上西エリカの作品において、さらに驚くべき真実となる——日本人は、その英知によって、言葉さえ培養し、生育させ、詩を花咲かせることに成功したのだ。

「わたしの花、わたしの花、わたしの花。わたしの桜草、わたしのフクロソウ、わたしのグラジオラス、わたしの金鳳花……」(ドウルモン「愛の告白」)。

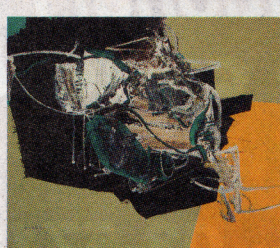
自分と同世代の日系ブラジル人と接するとき、——彼女が引用したペソーアの詩で「だが道は、神の業によって分岐する/私がそうであるところのものと、私にとっての他なるものへと」と言われているように——ありえたかもしれない自分の存在を感じずにはいられない。

すでに遠い過去のものとなったルーツを求めてブラジルからやって来る日本人と、それを迎える、ブラジルを愛して止まない日本人。私たちの花は、これから咲き誇ってゆくのだろう。



大岩オスカル

《Árvore de fogo》



間部学

《無題》

1978年新潟県生まれ。東京外国語大学大学院博士後期課程在学中、また同大にて非常勤講師。主にブラジル近代詩・ブラジル音楽を研究している。